

夢湧き夢に夢中

第10号

令和7年9月12日 文責：大谷

目が見えないから弱いのではなく

この夏、平井孝明さんという方のお話を聴く機会があった。平井さんは「メラニン色素欠乏症」という病気で、生まれつき視覚に障がいをお持ちである。中学生の時に柔道を始め、熊本盲学校の高等部に進学した十六歳の時に、パラリンピック（障がいのあるアスリートが参加する国際スポーツ大会）で活躍する選手らのことを知り、「自分もパラリンピックに出場して金メダルを獲って、周囲の目を変える」という夢を抱いたそう。それから約三十年。十六歳の少年が描いた夢が、その後の平井さんの人生を一変させたストーリーを、ここで少しだけ紹介したい。

本格的に柔道に取り組んだ高校時代。しかし、当初はなかなか結果が出ず、一時は辞めようかとも考えたそう。そんなとき、自分を奮い立たせた言葉に出会った。

「失ったものを数えるな。残されたものを最大限生かせ」

これは、パラリンピックの父とも称されるイギリスの医師、ルードウィヒ・グットマン博士の言葉で、障がいを乗り越え、自身の体や能力を最大限に活用して競技に挑むパラアスリートの精神を象徴するものである。平井さんもこの言葉を通じて、当時自らのことをこう振り返った。

努力していないから、弱いのだ

「目が見えないから弱いのではなく、努力していないから弱いのだ」と。

そこで、平井さんは自分自身にある課題を課した。

「他の人より三回努力しよう」

例えば、柔道のライバルが一日百回腕立て伏せをするなら、自分は百三回やる。それが一か月経てば約九十回、一年経てば約千回の差になる。平井さんは、まずそこから始められた。そして、いかなる時でも「自分はできるんだ」という自信が持てるよう、人より三回やってきたという根拠をつくることにしたそう。根拠のない自信から根拠をつけた」と平井さんは仰った。自分に自信が持てないなら、自信になるような根拠をつくっちゃえ、ということか。おもしろい発想だと思った。

そうして平井さんは2012年、夢に描いてきたパラリンピックへの出場を果たし、開催地であるロンドンの畳の上に立つことを成し遂げられた。このとき三十歳。十六歳で抱いたパラリンピック出場という夢が十四年の時を経て現実になったのだ。本大会では惜しくも準々決勝で敗退し、もう一つの夢であった金メダルには届かなかったものの、大観衆の前で試合ができることの幸福感に全身が震えたそう。そして、「四年後のリオ・パラリンピックで必ず夢を叶える」と、さらに夢への決意を強くして、帰国の途につかれたのだった。

その後の競技人生や現在に至るまでのお話は次号にて。いずれにしても「努力していないから弱い」という十六歳（当時）の言葉は、怠惰な今の自分の心に深く深く刺さる。

■ 去る8日に実施したPTA除草作業では、お忙しいところ白水校区の保護者様に多数ご参加いただき、誠にありがとうございました。おかげさまで、とてもきれいに整備していただきました。心より感謝申し上げます。今後とも、引き続き、御理解と御協力をよろしくお願い申し上げます。